

芸術の秋 その2

芸術の秋であります。東京での在京同窓会に出席しました折に、磐城高校第6回卒業生である江尻宏泰先生の講演を拝聴いたしました。江尻先生に置かれましては、昨年度の総会において、草野心平氏の「同窓の友に」の原書を同窓会に寄贈されましたが、大阪大学名誉・特任教授、プラハ大学客員教授、元カリフォルニア大学客員教授、ワシントン大学客員教授を歴任されており、宇宙物質とエネルギーの招待を探るべく、研究者として理論物理学を先行されてこられました。

そのお話の中で、非常に興味深く感じた部分がありました。

「物質の究極の正体は、素粒子とそれを結ぶばねである。」と規定されたのです。エネルギーは原子や原子核内の小さなばねに潜んでおり、バネの留め金が外れると大きなエネルギーとなって放出されるのだそうです。

ところで、今、スタン・ゲッツというサキソフォン演奏者であるジャズの専門家の本を読み始めました。ドナルド・L・マギン作、村上春樹訳 「スタン・ゲッツ 音楽を生きる」という本です。その中で、スタン・ゲッツが、このような発言をしていることに注目しました。

「僕の人生とは音楽だ。何かしら捉えどころない、神秘的な、無意識的なやり方で、僕はいつも自分の内部にある張り詰めたばねによって、宙に弾き飛ばされ、おおむね強制的に音楽の完璧さに到達されてきた。」

両者ともに、内部にあるばねの力によって放出されるエネルギーが形作るもの、いわば突き動かす原動力について述べているのです。

私は長年、物質の原子核の核力について考えてきました。物質の核の力が、すべてのものを引き付けていくように、人と人をつなぐそれぞれの核の引き合う力を感じてきたのです。

その実感の中で、今回のばねの話は、非常に大きな啓発を私に与えていただきました。

核と核が引き合いながら、何かの大きな機転が訪れて、その核がもともと持つところのばねの留め金はずれることで、大きなエネルギーとなって外界に放出されるということです。

その放出が、音楽となり、動力となり、世界を突き動かしていくのであると考えられることは、何か神秘的なものであるとさえ思うようになりました。

「内なる強固なばねの力」を大切にしていけることが、変革や改革の力となり、次世代をけん引するのかもしれない。

